

【学生フォーラム】

カイゼンから考える地域活性化

人間環境大学 伊藤伸昭・遠竹明奈

はじめに

「改善塾」では、モラル訓練という士気を高める訓練を行った。このモラル訓練は、改善塾を受講するにあたっての洗礼ともいえる程、厳しいものであった。そして、これを乗り越えてこそ、初めて工場へ実習に行ける。工場では、ムダ取りをいう手法を学んだ。また、大学では、CHEP という学内改善活動を行う団体を作り、学内の様々な問題に取り組んでいる。このCHEP を通じて、互いに異なる背景をもつ人が交流することの大切さ、そして難しさを知った。しかし、地域においても同じような問題を抱えているのではないだろうか。

1. 改善塾とは

私たちの大学では「改善塾」という、現場(工場)で実習する、より実践的なインターンシップを実施している。改善塾とは、PEC 産業教育センターによる指導の下、トヨタ生産方式を現場で体験する活動のことである。この改善塾では普段の学生生活では学べないことを学ぶことが出来た。

(1) モラル訓練

一回目の実習で最初に行ったのが「モラル訓練」である。これは士気を高める為に行う訓練で、大声で「今日こそ私はやるぞ！やるぞ！やるぞ！やるぞ！やってみてから考えろ～！」と2～3時間、全員の動き・全員の動作が揃うまで延々と繰り返す。そして、何時間も訓練を行うことによって体に動作を覚えさす。このモラル訓練を行うことによって精神のモードが切り替わり、挨拶の声が大きくなり、動作が機敏になる。学校教育では、「挨拶は大切です」「挨拶をしましょう」などと教えるが、実際に声を出して挨拶の練習をすることはない。そのため、挨拶をしなければならないと頭で理解していても、タイミングを逸してしまうということが起きてしまう。しかし、モラル訓練で、動作を「体に刷り込ませる」ことによって考えなくても自然に行えるようになった。

そして、モラル訓練は「徹底的にやる」という姿勢を示す意味もある。大学では時間になれば全てが終わる。そのため、目立たないように息を潜めてやり過ごそうとしている学生が多数存在する。しかし、改善塾ではそういう態度は許されない。いつか終わると分かっているモラル訓練だけで二時間もあるのだ。さらに工場という現場へ行けば尚更許されない。大学のように大勢の中の一人でも、受身の存在でもないのだ。そして、「自分」が存在することの重みを感じ、「やらなければ」という意思が湧いてくる。

(2) 改善(停滞・運搬・動作)とは

二回目の実習では工場へ行って実際に「改善」の手法を学んだ。工場では工程と工程の間に必ずムダがある。このムダをなくす作業が「改善」だ。

具体的に述べると、ムダには大きく別けて三つある。一つ目は 停滞、二つ目は 運搬、三つ目は 動作 である。停滞 と 運搬 は「モノ」に、動作 は「人」にかかわる。

まず 停滞 とは「作業をしている人の横に大量の材料が置いてある」「完成品が倉庫の中にしまっている」という現象などのことである。これらは全て停滞という名のムダである。

次に 運搬 とは「ある工程が終わった後に別の工程へ運ぶ」といった場合である。フォークリフトや、台車、トラックなどが大量にある場所は運搬というムダが多発している。

最後に 動作 であるが、動作は人の動きである為なかなかムダを見つけることが出来ない。そのため、目を凝らして人の動きをじっと見る。そのうち「何度も机をあけている」「いつも棚で何か探しものをしている」などの何度も同じ動作をしている人が見つかる。この場合には整理・整頓が必要である。このように、普段の何気ない動作の中にもムダは潜んでいる。

実に私たちの身近には多数のムダが存在する。このムダ取りの能力は、実践して初めて身に付く。そのために私たちは実際に工場を3社、4回に渡って改善実習を行った。中小企業の浜松化学(株)(株)ナベヤ、大手のソニーEMCS(株)美濃加茂テックの工場に行かせて戴いた。ここで分かったことは、大企業は改善が徹底している！ということだ。

2. CHEP とは

私たちは改善塾を通して、モラル訓練の本質、そして改善というムダ取りの本質を学ぶことが出来た。さらに、私たちは改善塾を通して学んだことを大学に活かせないかと考えるようになった。そこで私たちは、改善塾という枠を超えて、「CHEP」という意見交換会の場を大学で作った。CHEPは、人間環境大学の特色である「歴史・心理・環境の各分野の視点から共通するテーマについて話し合うこと、また、話し合いを通して問題意識を高めることを目的」として立ち上げ、活動をしている。

CHEPを立ち上げるにあたり、全くのゼロから出発した為、当初はどのように進めて行けば良いのかわからず非常に苦労した。特に、苦労したことはテーマ決めと人集めである。

この問題を解決する為に、毎日夜遅くまでミーティングを重ね、自分たちが納得いくまで話し合い、さらに、大学祭でCHEPを告知する等のPR活動、また、ポスターや広告を作成するなどの準備を長い期間かけてしてきた。そして、現在まで三回、CHEPを開催した。

私たちはCHEPの活動を通して、意見を述べる楽しさ、また、自分と異なる意見を聞くことにより、新たな発見や驚きを味わうことが出来た。しかし、課題も浮かび上がってきた。

第一に、CHEPを運営するメンバー同士で情報の共有がなかなかできず、意思の疎通を欠いてしまった。第二に、メンバーの役割分担がしっかり出来ていなかった為、ミーティングをスムーズに進行することができず、無駄に時間を費やしてしまった。第三に、CHEPを開催した後は、話し合いで出た意見や感想をまとめ、「CHEP通信」として報告書を作成し公表しているが、作成に時間がかかり、リアルタイムで公表することが出来ていない。第四に、現在メンバーが就職活動などで忙しい為、なかなか集まることができず、定期的にCHEPを開催出来ていない。

私たちは、このような課題を解決しつつ、CHEPを通じて、大学の特色でもある三分野の境界線の無い交流を取れるように努力していきたい。そして、本学では三分野を総合的に学ぶことを目的としている為、今以上に交流を盛んにする必要性を感じている。

そして、この問題は本学だけではなく地域にも共通する問題点ではないかと考える。地域には様々な人々が暮らし、生活を営んでいる。地域においても私たちの大学と同じように、交流がまだまだ上手く取れていない課題を抱えているのではないだろうか。また、私たちはCHEPを通して、三分野からの交流を目的として活動しているにも関わらず、ついCHEPを開催することだけが目的となってしまった。今後はCHEPの目的をはっきりさせ、今まで以上の成果を出せるように活動を続けていきたい。